

ハイデガーと西谷啓治 ——ニーチェ解釈をめぐって——

秋富 克哉

西谷啓治が日本でニヒリズムという主題を最も徹底的に問うた思想家の一人であることに、異論はないだろう。その西谷は、1952年に発表された「ニーチェに於けるニヒリズム＝実存」において、ハイデガーの論考「ニーチェの言葉「神は死んだ」」に言及し、次のように語る。すなわち、

「ハイデッガーは「神が死んだ」というニーチェの言葉を、「超感性的な世界は作用する力がなくなっている。それは如何なる生命をも与えてくれない。形而上学、即ちニーチェにとってプラトニズムとして理解された西洋哲学は、終りをつげた」、ということの意味すると解している (Holzwege, S. 200)。また、「ニヒリズムの本質と生起との範域は形而上学そのものにある」ともいう (ibid., S. 204)。私はむしろニーチェがニヒリズムの領域を、形而上学のみならず更にモラルにまで及ぼしたことを重視したいと思う。とにかくプラトニズム的キリスト教的な形而上学とモラルの全体系が問題化したのである」(『西谷啓治著作集 第8巻』創文社、1986年、S. 188。*旧漢字は新漢字に改めた)と。

すぐに気付かれるように、ここで西谷は、形而上学とモラルの領域をあえて区別し、ハイデガーのニーチェ解釈の核心を押さえながらも、それが前者に限定されると見なしている。そのうえでニーチェがニヒリズムの領域をモラルにまで及ぼしたことを重視したいというのは、ニーチェとハイデガーのニヒリズム理解の違いを重視する西谷自身の立場であり、それは要するに、ニーチェのニヒリズムをめぐりハイデガーと西谷の違いである。

しかし、ハイデガーは、膨大な「ニーチェ講義」を通して、「神は死んだ」ということで言及される神がキリスト教の神であり、しかも「道徳的な神のみが反駁されている」ことを、ニーチェの遺構をもとに指摘しているし、モラル(道徳)についても、たとえばニーチェ第4講義「ヨーロッパのニヒリズム」のなかで、「形而上学についてのニーチェの「道徳的な」解釈」を論じている。これらのことを踏まえるなら、ハイデガーのニーチェ解釈がモラルの領域に踏み込んでいることは明らかである。おまけに、西谷が先の論考を書いた時、ネスケ版『ニーチェ』2巻は未だ公刊されておらず、西谷自身、自著『ニヒリズム』(1949)に対して66年に記した「新版緒言」では、旧著の内容に関して最も書き直す必要があるのはハイデガーを扱った章であると断り、その間のハイデガーのニヒリズム解釈を示す著作として、上記『ニーチェ』以外に主要なテキストを挙げておける。

それでは、もし西谷がハイデガーのニーチェ関係の全論考に目を通して、モラルについての言及を知っていたなら、冒頭のような発言はなされることがなかっただろうか。それとも、それでもやはり、一つのハイデガー批判として提出され得ただろうか。

筆者は、後者の見解の立場に立って、あくまでここに、ニヒリズムの本質の理解に関わる両者の決定的な違いを見出したいと思う。問題は、「形而上学」と「モラル」、そして双方の

関係についての理解の違いであるが、ハイデガーが「価値」思想を軸に据え、形而上学とモラル（道徳）を言わば一つにしてニーチェを受け止めたのに対し、西谷が二つの領域を明確に区別しようとするとき、両者の本意はそれぞれどこにあったのだろうか。それはニーチェ・テキストの解釈の客観的な正しさというレベルの問題ではなく（もちろん、テキスト解釈がどうでもよいということではない）、結局、ニヒリズムの本質をいかに理解するか、そしてニヒリズムの射程をどこまで広げて受け止めうるかということに関わる。ここで試みたいのは、まずは、上記「形而上学」と「モラル」の観点から両者のニーチェ理解を確認することであるが、より大きな構想として、ニーチェ思想を軸に、西洋と東洋それぞれの伝統を踏まえてニヒリズムの問題に踏み込んだ両思想家の立場を検討することであり、言い換えれば、ニーチェとの対決を通して独自のニヒリズム理解に向かった各々の思想的可能性を、「現代におけるニヒリズム」という視点のもとに検討することである。したがって、手続き的には、ハイデガーと西谷のニーチェ解釈を、両者の他のテキストをも踏まえながら検討することになるが、特に「ニヒリズムの超克」という課題との連関で、「歴史／時間」と「主体」（ニーチェ解釈に即して言うなら、「同一なるものの永劫回帰」と「超人」）に関する両者の立場に着目したい。